

昭和期愛媛の農業構造(8)

川 東 蟬 弘

目 次

第1章 昭和期愛媛の農業生産

第1節 農産物価格の暴落

第2節 主要農産物の作付面積と生産高の推移

第3節 農産物の生産額構成比の変化

第2章 主要作物の状況

第1節 米・麦作 (第7巻第1号)

第2節 養 蚕 (第7巻第2号)

第3節 果 樹 作 (第7巻第3号)

第3章 農業経営と農民層分解の状況 (第7巻第4号)

第4章 地主制の危機 (第7巻第5号)

第5章 小作争議の展開と衰退

(1) 昭和2年 (第8巻第6号)

(2) 昭和3年 (第9巻第3号)

(3) 昭和4年 (以上, 本号)

(3) 昭和4年

この年の争議の発生件数は、16件となっており(係争中は除く)、前年と同様停滯的である。しかし、係争中の争議がなお続いているのも特徴である。また、前年の昭和3年産米が風水害等のため不作であったため、翌4年に入り、争議が発生した。また、4年産も地域により不作となり、それが原因で争議が起きている。また、昭和4年に、米穀検査制度が改正され(新たに「穀物検査規則」として制定。生産米検査は従来合格、不合格であったが、移出米検査と同様に、1等、2等、3等、4等、等外と格付けし、また、南予は従来適用除外であっ

たが、南予にも適用するようになった。10月1日施行)、それに伴う争議が見られたのも特徴である。

地域別・郡別では、『愛媛農業要覧』の数字によると、前年と同様、南予の北宇和郡が7件で最も多かった。他の諸郡では越智・温泉郡が2件で、新居郡、東宇和郡、南宇和郡が各1件であった。その他の諸郡ではゼロとなっていた。南予で尚持続的に争議が闘われたのは、全国農民組合の組織が残っており、また、蚕業不振のため、小作農民の窮乏化が進んだためであった。

以下、この年の争議の状況について、係争中の争議も含めて見てみよう。

新居郡泉川村大字高須における前々年度からの係争中の争議において(昭和2年12月20日、地主の原繁松が小作人高橋辰之助に対し、自己都合により賃貸借契約解除の訴訟を提起し、裁判中。関係田1反3畝20歩)、昭和4年1月、小作人高橋は、耕作継続を求めて、裁判所に対し小作調停法の申請を行った。だが、小作側は妥協的となり、この小作地のうち、4畝歩は7、8年前から、また、6畝歩は4、5年前から桑苗を植付けており、その収穫は最盛期ないし、最盛期に入らんとしつつあり、時価に見積もっても200円を下らない、小作地を引き上げる際には当地方で慣習となっている耕作権を買い取れと主張した。それに対し、地主側は、大正13年に前地主の黒川安太郎から小作地を買い受けたが、耕作権の話は一言半句もなかったと拒否したが、小作地を返還されれば、小作の立場も考慮し、現在の耕作権に対する時価額に相当するお金を支払ってもよいと言い、小作と地主の両者は調停委員会に調停を無条件一任した。そこで、調停委員会は最近の耕作権売買価格の状況等も調べ、4月、次のような調停案を出し、双方が受け入れ、解決した。それは、①小作人は昭和4年3月末に、桑園のまま小作地を地主に返還すること。②昭和3年度の小作料6斗6升8合を同期日までに支払うこと。③地主は小作人に100円を交付すること、等というもので、小作側に不利な調停であった¹⁾。

1) 『昭和4年小作争議綴』、『愛媛新報』昭和4年3月19日。

また、同郡垣生村において、隣接町村に比べて、奨励米が少ないとして、前年度から奨励米問題で争議が勃発していたが、昭和4年12月10日、同部落の小作農民が会合し、小作組合を結成し(垣生小作会、350名所属団体なし)、小作人達は、昭和4年産米より穀物検査制度が改正され、生産検査についても移出検査と同様、1等、2等、3等、4等、等外の5階級の等級が附されることとなり、その結果、去年の2等米は本年には3等米となり、また、去年の3等米は本年には4等米となり、従来に比して奨励米が下がるし、検査は厳しくなり、小作人の労費多くなるとして、1等米5升、2等米4升、3等米3升、4等米2升、等外米賞罰なし、の要求を地主に対し行った(小作人350名、地主25名、関係田130町歩)。それに対し、地主側はその解決を小作官に一任することとした。12月19、20日小作官が出張し、地主や村長等と懇談し、翌年春に解決の労をとるとして、越年した。この争議は翌5年3月11日小作側が会合を開き、小作官に無条件一任するや否やを審議し、この時は結局硬派の主張が通り、小作官への無条件一任は拒否された。しかし、その後、小作側は妥協的となり、3月13日、再度委員会を開き、小作官に無条件一任することを決めた。4月12日、藤井小作官が出張し、その調停により、次のような裁定で解決している。それは、①小作人が3等以上の検査済米を小作料として納付した場合に、地主は小作人に対し、1等米は3升5合、2等米は2升5合、3等米は1升の奨励米を支給すること、②小作人は小作料4等米納付の際には1石につき1升を、等外米納付の際には5升を地主に納付すること、③地主は2月末までに小作料を納付するばあいには、等級の如何にかかわらず小作料1石につき1升の完納奨励米を給与すること、等々というもので、要求額に比し、低い妥協的解決であった²⁾。

周桑郡中川村大字関屋の前年度よりの係争中の争議において(今治市の小作人矢野有隣は3年前に周桑郡中川村大字関屋に田5町歩を購入し、同田地の灌

2) 『昭和4年小作争議綴』。

概用水路敷地 800 間を 6 名の地主から借地し、1 間当たり玄米 5 合、総額 4 石の小作料を支払っていたが、この小作料が高額すぎるとして、昭和 3 年（月日不明）に減額要求をなし、小作料を納付しなかったため、地主側が西条区裁判所に小作料の請求ならびに土地返還を求めて裁判中）、数回公判がなされたが、容易に解決しなかった。そこで、裁判長は当事者に示談を進め、地主側には中川村長が、小作側には小作官が勧解をすすめ、漸く、小作官に解決条件を一任することとなった。そこで、小作官が和解案をだし、昭和 4 年 8 月 6 日、1 間につき 2 合 5 勺とすることで解決した。従来の半額で、妥協的解決であった。ただし、この水路に平行して他の土地に灌漑する水路があり、その小作料は 1 間につき玄米 1 合となっており、従来の半額でも高額小作料であった³⁾

また、同郡小松町大字北川の、大正 15 年以来の係争中の争議において（水揚げポンプ代の地主負担を要求し、昭和 3 年小作調停法に持ち込まれていたが、不成立となっていた）、昭和 4 年 8 月 23、24 日、壬生川署長、香円寺住職らが調停に入り、交渉を重ねた結果、経費は地主小作半々とするすることで、4 年ぶりに解決した⁴⁾

また、同郡田野村大字長野において、同部落の小作農民は、地主側が灌漑用ポンプを据え付け、旱害をなくすると約束していたのに、約束を守らなかったとして、昭和 3 年産米について、小作料を 8 割納めたが、2 割を納付せず、対立が続いていたが、壬生川署の調停により、昭和 4 年 11 月頃、残米を納め、また、11 月 11 日には地主と小作の代表が 4 年産米について坪刈りも行い、円満に解決している⁵⁾

越智郡立花村大字八町において、今治市の地主井出重信は負債返済のため、越智郡立花村大字八町に所有する土地 3 町歩を小作人 15 名に買い取らせようとしたが、小作側は買い取りの資力なきため、これに応じなかったため、昭和

3) 『昭和 4 年小作争議綴』。

4) 『愛媛新報』昭和 4 年 8 月 28 日、9 月 19 日、10 月 8 日。

5) 『愛媛新報』昭和 4 年 11 月 14 日。

4年5月1日、小作契約解約を通知した。さらに、井出は、5月3日、そのうち1町3反を八町部落の地主貴田隆助と青野久松に売却し、貴田・青野の両名は即時土地返還を小作人6名に対し通告した。ここにおいて、争議が発生した。5月11日、小作人6名は、立花駐在所へ行き、1カ年猶予せられたしといい、救済斡旋を要望したが、地主側はこれを拒否した。また、他の9名の小作人ももし小作地を地主井出から買い取らなければ、結局土地返還の請求があると予想して、さきの6名の小作人と行動を共にし、地主3人、小作15名の対抗となった。そこで、地主側は小作人に対し、①小作期間を1カ年留保する、しかしその条件として、②小作料を徴収しないが、小作地の時価の9%を支払うこと、を提案した。それに対し、小作側は、地価反当たり800円と見積もる時は利子が72円となり、現在支払っている小作料は反当たり1石2、3斗ゆえ、現在の米価に換算すると35、36円であり、小作料2年分に相当し、到底認められない、と主張し、対立が続いた。そこで、越智武村長ならびに所轄の警察署長が調停に入り、6月15日、小作人の代表を村役場に呼び、低利資金2万円を小作人に貸し付けるから、小作地を買い取るよう提案し、小作側も了解し、村長に一任した。そこで、売買価格が焦点となり、6月24日、地主側は反当たり800円ないし900円なら売却するとの意向を示したが、6月25日、小作側は680円ないし800円の範囲ならば購入すると主張し、100円ほどの差があり、協議は纏まらず、決裂した。そこで、地主の1人青野久松は、9月9日、小作人宗野篤治に対し、小作地返還訴訟を今治区裁判所に行い、公判が行われ、越年した。また、もう一人の地主貴田隆助も、翌5年1月17日、小作人巻長五郎および藤井新一に対し動産仮差し押さえの執行を行った。この争議は、昭和5年2月25日、小作人宗野、巻が地主青野に対し、2月27日に小作人石丸、藤井が地主貴田に対し、6月2日には小作人元藤又造ら8名が、地主井出重信に対し、小作調停法による調停の申請を松山地方裁判所に出し、調停委員会で審議が行われた。その結果、6月10日の調停委員会で、元藤又造ら8名分が解決し、6月14日には藤井、巻、石丸分と、宗野分が解決した。その調停は、元藤又造ら8名分は、

①昭和5年度の春の麦作刈り取りまで小作を認める、②小作地は昭和6年6月15日限り、地主に返還すること、③地主が土地を売却した場合、その買い受け人より引き続き小作できるように尽力することであり、藤井、巻、石丸の分は、①昭和5年度の春の麦作刈り取りまで小作を認める、②小作地は昭和6年6月15日限り、地主に返還すること、であり、宗野の分は、①小作地の即時明渡し、②代替地を提供する、というものであり、基本的に地主の土地取り上げを容認しており、小作側に不利な調停であった⁶⁾。

また、同郡清水村大字四村において、昭和4年10月、同部落の小作人宇高は、本年の産米が旱魃により収穫減収したとして、地主松浦に小作料減額の要求を行い、争議となった（小作1名、地主1名、関係田4反7畝27歩、畑2畝）。この争議は越年し、翌5年5月1日、地主松浦は、小作人に対し、小作地返還および昭和4年度の小作料支払い請求の通知を書留郵便で行い、それに対し、小作側が6月6日、全農愛媛県連合会本部の小川重明に相談し、あくまで小作料減額を要求し、小作地返還には応じられない、との態度を続けた。そこで、村の有志が調停に入ったが、双方共頑強で中々解決しなかった。特に小作側は、係争小作地は実測田4反6畝12歩、畑も1畝16歩にすぎないとして、今日迄の過払小作料を支払うよう要求し、感情的衝突にまで発展していった。しかし、その後、10月9日、村の消防組が調停に入り、次の条件で漸く解決している。それは、①向こう15カ年小作権を承認する。②昭和4年度小作料を納入すること。③過払小作料はその半額を地主が小作に支払うこと、というもので、小作料減額はなされなかったものの、小作側に有利な解決であった⁷⁾。

また、同郡近見村大字大浜字近見において、同部落の小作農民達は、本年産米（昭和4年）が稀有の旱魃にて減収著しいとして、地主に対し、小作料減免の要求を出し、個々交渉の結果、解決していたが、地主井出要吉外1名は小作人の運動に反感をもち、小作料減免に応じなかったので、争議となった（小作

6) 『昭和4年小作争議綴』。

7) 『昭和4年小作争議綴』。

9名、地主2名、関係田1町6反3畝)。地主井出要吉外1名が特に小作人の要求に頑として拒否したのは次の背景があった。即ち、近見地区は山林保護の為大正13年に森林組合を結成し、組合長に河野氏、副組合長に井出氏が就任していたが、井出氏が懇意にしている漁民に森林の落葉採集せしめたため、部落民が井出氏に反感を持ち、昭和4年春の信用組合役員改選において、同盟連判して井出氏を落選せしめ、さらに、婦人会役員選挙でも井出氏の婦人を排斥するなどの行動を取り、特に、井出氏の小作人13名中9名がこれに加わっていたとして、井出氏は小作側に反感を強めていた。そこで、11月18日に、村の当局者が藤井県小作官に調停を依頼し、19日、藤井小作官が出張し、両者を説得した。そこで、地主側は小作人が自覚反省し、改悛の情が表れれば、本年の早魃に対し、小作料減額してもよいと申し出た。他方、小作人側は謝罪的行為をするのは認めがたい、森林組合関係を解決せよなどといい、複雑化したが、種々勧解の結果、双方小作官に裁定を一任することを了承し、11月20日、次のような裁定案で解決した。それは、①地主は小作人を愛護し、小作人は地主を敬い、融和親善を図ること、②昭和4年度の稲凶作にたいする小作料減額については互譲的精神に基づき、地主小作人間で個人的協定をなすこと、③昭和5年度以降天災その他不可抗力による減収のため、小作料減額の必要ある時は、刈り取り前に地主に申し出て実地検見の上減免協定をなすこと、若し双方の意見が一致しない場合は、小作官の決定に一任すること、等であり、ややあいまいさを残してはいるが、小作側に比較的有利な解決であった⁸⁾。

温泉郡拝志村大字下林字宮ノ段において、昭和4年1月2日、同部落の小作人で小作人組合に加入している小作農民41名が、この日部落青年会堂に集まり、昭和3年産米の凶作に対する戦術を検討していたが、そこで、小作人組合員で且つ水平社員でもあるメンバーが農民組合と提携して、方針をきめる必要があると主張し、ただちに松山市における全国農民組合に連絡を取ることとし

8) 『昭和4年小作争議綴』。

た。連絡を受けた全国農民組合の池田勝二は、小作側に小作料4割減額を要求し、飽くまで団体的行動をとることを求め、また農民組合に加入するよう勧めた。翌3日、小作人41名は再度部落青年会堂に集まり、そこで農民組合に加入することを決め、争議に入った（小作41名、地主10名、関係田18町歩）。そして、1月5日、農民組合は小作問題演説会を開催し、弁士として全国農民組合員高市盛之助、亀井精一、中田秀一が来て、演説をなし、また、小作人も演説をなした。だが、この様に、農民組合が介入してきたことに対し、村当局、警察が危機感を持ち、拝志村村長池川益雄が介入し、小作人委員会を開かしめ、穏健な要求をなすこと、農民組合に絶対加入しないよう説得した。そこで、小作人達が妥協的となり、将来全国農民組合に加入しないことを前提条件に、①本年限り小作料4割減、②奨励米は1石につき3升支給、③小作権の確立を要求することを決めた。それを受け、池川村長と所轄松山警察署長は地主側に対し、凶作に鑑み、譲歩するよう説得した。そして、池川村長は、1月10日、村役場に地主代表と小作代表を集め、種々調停し、小作側は要求を小作料1割5分減まで引き下げ、他方地主側は1割2分減に固執し、対立したが、結局地主側が折れた。また、奨励米支給についても小作側の要求を認めた。農民組合加入に恐怖を抱いたためか、短期間での小作側に有利な解決となった⁹⁾

また、同郡和気村大字大山寺において、前年度争議が起きていたが（昭和3年1月に小作人が小作料減額を要求、小作官と和気村村長が調停者となり、10月31日裁定が行われ、解決していたが、その後小作料算定方法及び納期について対立し、両者より申し出あり、12月6日再度裁定があり、同時に正式調停を求められていた。小作35名、地主10名、関係田7町1反9畝26歩）、昭和4年2月22日、双方より調停申請があり、3月8日、次のような調停により解決している。それは、①小作料は昭和3年度以降別紙の通りとする（注：小作地を1等から11等にまでわけ、1等の小作料を1石9斗とし、以下1斗ずつ減じ、

9) 『昭和4年小作争議綴』。

11 等を 9 斗とする), ②凶作その他により小作人が小作料減免を要求する場合, 稲刈り取り前に地主に申し出, 立毛検見を受け, 減額の要否ならびに免引額の協定をなすこと, 若し意見一致しない場合は双方 2 名の委員を選出し, その委員会に一任すること, ③小作料は毎年収穫終わり次第に納付すること, 遅くとも翌年 1 月末までに納付すること, ④地主がやむを得ず土地返還を要求する場合, 当事者間で協議出来ない場合には, 前項の委員会で返還の要否, 時期, ならびに立毛その他の保証等を決定し, 双方これに異議を申し立てないこと等々というもので, 妥協的解決であった¹⁰⁾

また, 同郡和気村大字和気浜字新開における, 昭和 2 年度からの係争中の争議において(小作料高率を理由に, 昭和 2 年度から小作料減額要求, 小作 1 名, 地主 1 名, 関係田 2 反 1 畝 2 歩), 久枝村安城寺の地主側, 須之内稔はこれに応じず, 逆に松山地方裁判所に小作料請求および土地返還訴訟を提起し(月日不明), 裁判中であったが, 小作人は, 小作料の相当減額と小作継続を求めて, 昭和 4 年 5 月小作調停法の申請を行った。そこで, 地主側は, 小作料は 3 石 4 斗 3 升 2 合で, 暗渠排水を大正 13 年に行い, 収穫増大している, にもかかわらず小作人は大正 14 年以降毎年小作料を延滞し, 現在 16 俵半にまで達していると主張し, 小作地返還を頑強に求めた。しかし, 小作官の調停により, 5 月 18 日次のような条件で解決した。それは, ①小作料は 3 石 2 斗 6 升 5 合に減額し, 従来通り耕作する, ②凶作その他により小作人が小作料減免を要求する場合, 稲刈り取り前に地主に申し出, 立毛検見を受け, 減額の要否ならびに免引額の協定をなすこと, 若し意見が一致しない場合は双方 2 名の委員を選出し, その委員会に一任すること, ③小作料は毎年収穫終わり次第に納付すること, 遅くとも翌年 1 月末までに納付すること, ④滞納小作料は 11 俵に減じ, それを昭和 4 年 6 月末に麦 1 俵, 同 4 年度小作料支払期に玄米 3 俵, 同 5 年度小作料支払期に玄米 3 俵, 同 6 年度小作料支払期に玄米 3 俵, 同 7 年度小作料支払期に 1

10) 『昭和 4 年小作争議綴』, 『海南新聞』昭和 4 年 3 月 9 日, 10 日, 『愛媛新報』昭和 4 年 3 月 12 日。

俵とする、⑤地主がやむを得ず土地返還を要求する場合、当事者間で協議出来ない場合には、前項の委員会で返還の要否、時期、ならびに立毛その他の保証等を決定し、双方これに異議を申し立てないこと、等々というもので、小作料が減額され、滞納小作料も減額され、小作継続もなされ、小作側に有利な解決であった。¹¹⁾

また、同郡正岡村大字中西字砂川において、小作人倉岡常吉は3年前から地主倉岡トキエから、トキエが結婚するまでとの条件の下で、小作地1反4畝10歩を借りて、小作していたが、トキエが大阪に出稼ぎにいき、村に居なくなったため、トキエの兄の倉岡菊次が小作地の返還はできず、また土地が横領されるのでないか、との疑いを抱き、昭和4年の田植期に小作地返還を迫り、6月20日に、倉岡菊次は小作地の耕作を始めた。そこで、小作人の常吉が激昂し、絶対小作地を返還せずと主張し、同6月20日、争議を有利に展開せんとして、全国農民組合愛媛県連合会堀江支部に相談し、同組合に加入し、抗争するに至った。そこで、正岡村大字中西の区長砂本善四郎らが調停に乗り出し、8月27日、次のような調停案を作った。それは、①小作人は向こう6年間従来通りの条件で小作する、②地主は理由なく、耕地の返還を要求しないこと、③小作人は農民組合から脱会すること、というものであった。双方これを了解し、初め、解決するかに見えたが、その後、7月16日、小作側が、次のような契約書案をつくり、振出にもどった。その契約書案は、①次の理由以外には地主は土地返還を要求しないこと、イ. 小作人の破産、ロ. 小作料不納、②小作地を返還する場合には1反につき300円をもって耕作権を買い取ること、③凶作の場合には小作料の減額をなすこと、というものであった。それには、地主側が拒絶し、調停者の砂本も仲裁の余地無しとして手を引いた。その後、調停もなく、放任のまま推移していたが、11月ころになり小作側が農民組合を脱会し、耕作も継続し、自然解決となった。¹²⁾

11) 『昭和4年小作争議綴』、『愛媛新報』昭和4年5月19日。

12) 『昭和4年小作争議綴』。

また、同郡拝志村において、同部落の小作農民約 200 名は、昭和 4 年 12 月 18 日、同村小学校に集合し、奨励米増額を要求することを決め、農会に提案している。¹³⁾

南予で前年同様争議が多発した。

東宇和郡野村町大字野村字木落において、同部落の小作農民高岡勇八ら 46 名(木落小作人組合、所属系統なし)は、昭和 4 年 11 月 20 日、4 年産米は夏季の旱害により収穫減少し、また、当部落の小作料は最高 1 石 5 斗、最低 8 斗と他に比して高率だとして、北宇和郡喜佐方の地主山下重久に対し、小作料永久 3 割減を要求した。それに対し、地主の山下は、11 月 28 日に 5 分減の回答をしたが、小作側は不服として、あくまで 3 割減を要求し、対立が続いた。そこで、野村町長や警察署長が調停に入ったが、解決せず、越年した。この争議は翌 5 年 1 月 26 日次のような条件で解決している。それは、①小作料永久 1 割減とする、②地主は農事改良の意味で成績佳良の小作人に若干の奨励金を支給する、というもので、妥協的解決であった。¹⁴⁾

北宇和郡において、県下では最も多く争議が起こった。

北宇和郡泉村大字出目字新田において、同部落の小作農民達は本部落の小作料は 1 反あたり最低 13 代、最高 18 代で(1 代は 1 斗)、近隣部落に比して 1 反歩につき 3 斗位高いと日頃から不平を唱えていたが、昭和 3 年産米が凶作であり、また、桑園も虫害のため被害を被っていた。そこで、小作人達は、地主に対し、小作料減額を求めて個々交渉をしていたが、地主が応じなかった。然るに、近隣部落においては、凶作を理由に小作料減額を要求し、平均 1 割 8 分位の減額を勝ち取っているのを鑑み、同部落の小作人 18 名が、昭和 4 年 1 月 10 日、会合し、個々交渉では目的を達することが出来ないとして、組合を組織し、争議をなすことを決定した。即日 18 名を会員とし新田小作組合を結成し、各組合員から玄米 1 升を集め、積立て、地主に対し、①小作料永久 3 割減、②水利費用の地主負担を要求し、争議に入った(小作 18 名、地主 11 名、関係田 8 町

13) 『海南新聞』昭和 4 年 12 月 21 日。

14) 『昭和 4 年小作争議綴』。

1反,畑3町)。それに対し,地主側は各田地に応分の減額はするが,一様の減額はしないと拒否し,対立した。小作組合側には日本大衆党系の北宇和郡泉村自治革新団が支援した。そこで,泉村村長の高田満穂らが調停に入り,1月16日,次のような条件で解決した。それは,①本年限り2割5分の小作料を減額する,②水利費は従来通り小作人の負担とする,③昭和3年度の小作料は4年1月18日までに完納すること,というもので,要求に比し低いが,比較的小作側に有利な解決であった¹⁵⁾

また,同郡旭村大字永野市において,同部落の小作農民達は昭和3年産米が虫害その他の被害により著しき凶作だったとして,地主に対し,小作料の減額を要求し,個々交渉の結果,多くは1割ないし3割の小作料減額で解決していた。しかし,全国農民組合に加盟の小作人7名は,個々交渉をせずに,1月7日,全国農民組合予土協議会の名をもって,本年限り小作料5割減及び差米廃止(1石につき2升5合)を書状をもって要求した(小作7人,地主5人,関係田1町8反2畝)。それに対し,地主側が1月11日,会合し,組合の要求を拒否し,個々交渉し解決すること,万一解決に至らない時は共同して小作調停法の申請をなすことを決めた。地主小作が個々交渉の結果,1月15日に地主1名,小作2名については,本年限り小作料3割減額で解決し,また残りの小作人も2月3日に3割減で解決した。要求額に比し低いが,小作人側に比較的に有利な解決であった¹⁶⁾

また,明治村大字目黒の前々年よりの係争中の争議において(目黒農民組合支部と地主清家茂ら15名との争議で,小作料3割5分減要求,昭和3年3月に,地主側は訴訟を提起し,小作側が9月に小作調停法の申請で対抗),両者が疲れ,昭和4年7月1~3日にかけて,裁判所および藤井小作官が調停に入り,漸く解決している。それは,①昭和2年度の小作料は1割減,②昭和3年度の小作料は1割5分減,③昭和4年度以降は1割減とする,というもので,妥協的解

15) 『昭和4年小作争議綴』。

16) 『昭和4年小作争議綴』。

決であった¹⁷⁾

また、同郡明治村大字上家地において、全国農民組合明治村上家地支部所属の小作農民12名が、1月9日、浅井政吉方に集まり、昭和3年産米は風水害のため凶作であり、また桑園も被害をうけ、その上米価下落し、小作人は諸公課及び肥料代にも窮しているとして、宇和島市の地主松岡嘉則に対し、本年限り小作料3割ないし6割(平均4割)の小作料減額を要求することを申し合わせた。だが、組合員中2人が脱落したため、他の10名が、1月24日再度会合し、全国農民組合明治村上家地支部の名をもって、書面で先の要求書を出した。それに対し、地主松岡は、昨年度争議がおこり、小作調停法により最近になって漸く解決し、永久減額をなしたのに、また翌年度も要求するとは不当だとして、絶対に要求には応じないとの強硬な態度を示し、さらに本年は調停の申請はせず、動産の差し押さえを行い、債権を執行するとのきわめて強硬な態度を示した。対立が続き、争議は越年した。この争議は、翌5年1月、小作側が漸次軟化し、9名の小作人は昭和5年度の小作料納入期までに小作料を適当に分割して納入することで解決し、1月30日には、昭和4年分の小作料の納入も行われた。1人なお未解決であったが、これも、種々折衝の結果、年賦償還で小作料を納入することで解決した。このように、この争議は小作側が要求を撤回し、敗北に終わった¹⁸⁾

また、同郡明治村大字豊岡の前々年よりの係争中の争議において(同部落の小作人山田鶴吉は、明治村大字松丸の地主武田半七から、田1反3畝28歩を小作料2石にて小作していたが、小作料が高いとして、昭和2年度から減額要求をしていたが、拒否され、また、3年度も3割7分減を要求したが、それも拒否され、対立が続いていた)、昭和4年9月、小作人は小作調停法の申請を行った。10月26日、次のような調停で解決した。それは、①昭和4年度以降の小作

17) 『昭和2年度小作争議綴』、『昭和3年度小作争議綴』、『愛媛新報』昭和3年10月20日、12月18日、『海南新聞』昭和4年7月9日。

18) 『昭和4年小作争議綴』。

料を1石8斗8升到減額する、②地主は本土地を昭和9年3月末日まで小作人に耕作させる、③昭和3年度の滞納小作料は1石6斗に減額する、その小作料のうち1石は4年10月28日までに金26円に換算して支払うこと、6斗は11月20日までに納付すること、④小作料の納期は毎年12月20日とすること、⑤昭和4年以降天災等不可抗力により減収となり、減額必要あるときは、刈り取り1週間前に地主に申し出、双方立ち会いの下に検見減額の協定をなすこと、双方において協定不納のときは、双方同意の上第三者の裁定に一任し、その裁定に双方異議を述べざることを、⑥小作人が納期に小作料を納付しないときは地主は直ちに強制執行を成すことを得、⑦小作人が小作料滞納2回に及ぶ時は、地主は本件小作契約が解除したるものと見なし、直ちに土地返還を請求することを得、等々というもので、若干小作料の減額がなされたが、5年後には小作地返還を余儀なくされ、小作側に不利な解決であった¹⁹⁾

また、同郡明治村大字富岡における前年よりの係争中の争議において（同部落の小作人で、全農明治村富岡支部組合員の竹内留吉と藤本末市の両名は、昭和3年12月、3年産米が水害と虫害によって不作だとして、高光村大字高串の地主赤松兵三郎に対し、小作料6割減の要求。それに対し、地主側が拒否したため、争議となり、小作人側は小作料を納付せず、越年していた。関係田5反5畝。竹内が2反7畝、藤本が2反8畝）、この争議は4年、地主側が憤慨して、小作料請求訴訟を行い（月日不明）、それに対抗して、小作側が4年12月2日、松山地裁宇和島支部に小作調停法の申し立てを行って対抗した。またまた越年し、この争議は、昭和5年4月に、次のような条件で調停が成立している。竹内の分は、①小作料を2石5斗2升とする（現行2反7畝、2石5斗6升5合）、②毎年12月末日までに納付すること、③小作料滞納2回に及ぶ時は、地主は地所の返還を請求できること、④昭和3年度滞納小作料を1石5斗1升とし、5年4月末までに支払うこと、⑤昭和4年度滞納小作料を1石4斗4升とし、5

19) 『昭和4年小作争議綴』。

年6月末までに支払うこと、等というものであった。藤本の分は、①小作料を3石3斗8升とする(現行2反8畝, 3石4斗3升), ②, ③は竹内の分と同じ, ④昭和3年度滞納小作料を2石とし, 昭和5年4月末までに1石, 6月末までに1石を納付すること, 等々というものであった。要求に比し低い, 妥協的な解決であった。²⁰⁾

また, 同郡明治村大字豊岡字前組における前年よりの係争中の争議において(全国農民組合の組合員達31名は, 昭和3年12月5日, 地主17名に対し, 昭和3年産米が風水害のため, 平年の3割~5割の減収だとして, 小作料永年5割減および差米4斗につき1升の廃止を要求。それに対し, 地主側が拒否したため, 争議となり, 小作側は小作料不納で闘う。関係田20町1反4畝5歩, 畑4反1畝), 4年1月12日, 地主1名, 小作9名の間で妥協が成立し, 本年に限り小作料2割5分乃至3割2分5厘減額(平均2割8分減)する, 差米は従来とおり4斗につき1升という条件で解決し, また, 残りの他の地主, 小作も1月28日, 本年に限り田は3割3分5厘, 畑は1割1分の減額とする, 差米は4斗につき1升納付する, 昭和4年春に地主小作双方より委員を選出し, 本争議関係田畑の小作料の改定を行い将来争議の根絶をはかる, という条件で解決している。小作側に比較的有利な解決であった。²¹⁾

また, 同郡明治村大字豊岡字後組における前年よりの係争中の争議において(昭和3年12月24日, 全国農民組合の組合員達37名が, 本年は風水害のため平年の2割5分位の収穫であり, その上米価暴落し, 小作人は諸公課肥料代等に窮し, 生活出来ないとして, 地主25名に対し, 小作料永年5割減額, 差米1石につき2升5合の廃止を組合の名をもって要求。それに対し, 地主側は, 昨年本部落で地主小作協定委員会を設立し, 争議に至らないように小作料1割ないし1割5分の減額を実行したのに, このような争議を惹起するのは不穏当だとして, 憤慨する態度をとり, 12月27日に, 協定委員があつまり協議したが,

20) 『昭和3年小作争議綴』。『昭和4年小作争議綴』。

21) 『昭和3年小作争議綴』。

そこで、昨年の協定は地主に有利だとして、両者の対立が続き、越年していた。関係田 27 町 1 反 29 歩)、4 年に入り、地主の内、小地主が争議が長引くと小作料取り立て不能となると恐れ、妥協に走り、1 月末に地主 7 名と小作 15 名が本年に限り 2 割 3 分ないし 5 割減 (平均 3 割 6 分減) で解決し (関係田 1 町 7 反 1 畝)、3 月 6 日には大地主の吉良銀次郎の小作 16 名の間で 3 割 7 分減で解決し (関係田 11 町 7 反)、5 月 10 日には地主 2 名、小作 12 名の間で 3 割 7 分減で解決し (関係田 3 町 5 反 1 畝)、5 月 25 日には地主 9 名、小作 21 名の間で、2 割ないし 3 割 7 分 (平均 3 割) で解決し (関係田 9 町 7 反 3 畝 27 歩)、7 月 18 日地主正木哲市等 3 名と小作 6 名の間で 2 割ないし 3 割 7 分減で解決している (関係田 9 反 1 畝 23 歩)、しかし、残余の地主 3 名と小作 5 名の間で妥協がならず、そのうちの地主の一人二宮道次郎が、7 月 17 日に、関本ら 3 人の小作人に対し、土地返還請求訴訟を宇和島区裁判所に提起した。それに対抗して、小作側は本争議の指導者である全農予土協議会長・井谷正吉と協議し、9 月 4 日、松山地方裁判所宇和島支部に小作調停法の調停申し立てを行った。また、別の地主・武井半七も小作人山田に対し、8 月 5 日、宇和島区裁判所に対し小作料支払い請求の訴訟を行った (関係田 1 反 3 畝 28 歩)。それに対抗して、小作人山田も井谷正吉と協議し、8 月 30 日に小作調停法の調停申し立てを行った。この争議は越年し、翌昭和 5 年 4 月 6 日、小作調停委員会が開催され、地主二宮、小作関本の分は小作料減額で妥協解決し、地主武井、小作山田の分は小作側の土地返還で小作側の敗北に終わっている。なお、残余の地主松岡貞治と小作人城口の分は小作料 1 石 8 斗 5 升 5 合を 1 石 4 斗 5 升到、2 割 2 分の減額で解決している。²²⁾

また、同郡明治村大字富岡において、小作人田中初治は (全農明治村富岡支部所属) は、富岡の地主三好鉄太郎に対し、長年争議を起こしていたが、前年の昭和 3 年 5 月 28 日の小作調停において、滞納小作料は分割して支払うこと

22) 『昭和 3 年小作争議綴』、『昭和 4 年小作争議綴』、『愛媛新報』昭和 4 年 10 月 31 日。

(滞納小作料大正15年度分と昭和2年度分合計5石4斗7升中、4斗7升は切捨て、5石を支払うこと、そして、そのうち5俵は昭和3年6月25日までに、残り7俵半は昭和3、4、5年の12月25日に分割納入すること)で、調停成立していた。しかし、小作側は5俵は納入したものの、昭和3年12月25日に納入すべき3年産の小作料3石8斗2升5合および滞納小作料を納入せず、調停を履行しなかった。そこで、地主側が、4年1月強制執行により2石4斗の粃を差し押さえ、また、10月19日には宇和島区裁判所に対し、小作人田中の耕作地の立毛を差し押さえる等の行動に出た。それに対し、小作側が11月9日、差し押さえ解除の手続きをなし、11月12日解除されている。この争議は越年し、翌昭和5年4月、地主側から小作調停に持ち込まれ、5月5日、小作地返還で解決している。小作側の敗北であった²³⁾

また、同郡御楨村大字御内字前田において、同部落の小作人堀田豊が、高近村字高の地主清水友太郎から、田1反1畝18歩を、小作料1反あたり14代(1代は1反につき小作料1斗のこと)で借りていたが、昭和3年産米は出穂期に風水害があり、減収となり、刈り取りをしたところ、玄米9斗2升、古米1斗6升、合計1石8升の収穫しかなく、小作料1石6斗2升4合に達しない為、差し引き5斗4升4合を減額してくれと要求した(月日不明)。それに対し、地主側が拒否し、小作料の請求、土地返還を求めて訴訟となった(月日不明)。さらに地主側は別の小作人に小作せしめるなどの行動を取った。そこで、小作側が、昭和4年9月9日、小作地がないと一家の生計が立たないとして、小作料減額および小作継続を求めて、小作調停法の申請を行った。調停申し立て後、有志が調停に乗り出し、次のような示談で解決した。それは、①昭和3年度の小作料は1割5分減額する、②小作人に従来通り耕作させる、というもので、小作側に有利な解決となった²⁴⁾

また、同郡好藤村大字深田の係争中の争議において(全国農民組合好藤村深

23) 『昭和4年小作争議綴』、『昭和5年小作争議綴』。

24) 『昭和4年小作争議綴』、『愛媛新報』昭和4年9月15日。

田支部員 25 名、組合員外 40 名、昭和 3 年 12 月 20 日、協議し、今夏以降の風水害により平年作に比し 1 割の減収の上、唯一の副業である繭価、糸価の下落により農村経済は窮迫しているとして、地主 18 名に対し、小作料 3 割減、口米 1 升の廃止を求めた。関係田 25 町 6 反。それに対し、深田部落の区長山下友一郎等が調停に入り、12 月 24 日奔走したが、地主側は 1 割減に固執し、小作側は 3 割減を要求し続け、対立が続いた。12 月 25 日に再び区長らが調停を行い、地主側は 1 割 5 分の減額まで譲歩したが、小作側が譲歩せず、なお対立が続いていた) この争議は 4 年、村会議員の横山照吉らが調停に加わり、奔走し、1 月 11 日に地主 15 名、小作 45 名を集め、妥協を求めた。そこで、小作側は 2 割 5 分まで譲歩したが、地主側が 1 割 5 分に固執したため、これまた決まらなかった。翌 12 日に、再び協議が行われ、13 日に次のような条件で解決した。それは、①本年限り小作米 2 割減。②口米は従来通り 1 俵 (4 斗俵) につき 1 升いれること、③地主より小作側に口米実施の代償として、金 1 封を支給すること、というもので、小作側に比較的有利な解決であった²⁵⁾

また、同郡愛治村大字西野々の前年よりの係争中の争議において (小作人芝義三治は、約 25 年程前から地主清家与三から田 2 反 5 畝 18 歩を小作料 3 石 1 升 5 合の条件にて小作していたが昭和 3 年 11 月、昭和 3 年産米の凶作を理由に、地主に対し小作料軽減要求を出した。それに対し、地主側は小作料の減額を拒否し、ただ、その納入を翌年納期まで延期を認め、解決することとなった。しかし、地主はこのような小作料軽減要求を再三見るは煩にたえないとして、12 月に小作に対し小作地返還を求めた。それに対し、小作側は容易に確答せず、越年していた)、この争議は昭和 4 年、地主側が小作地返還を承諾したものと即断し、同部落の別の小作人青木シゲに小作せしむることとした。そこで、小作の芝は、6 月 20 日、小作地返還の承諾を与えていない、もし耕地を返還すると糊口に窮すると地主に申し入れた。そして、小作人芝は早く稲の植付けをする

25) 『昭和 3 年小作争議綴』。

のが大事だとして、6月22日、隣村の泉村の農民組合員の応援を得て、田拵に着手した。そこで、警察が出てきて、松丸警察署が共同耕作の中止を求め、穏便なる解決をするよう説得し、また、地主側の清家与三もことさら小作契約の期限が昭和6年までということもあり、小作側と事を構えることも本意ならずとして、仲介者の要請をうけ、6年まで芝に小作させることで円満解決した²⁶⁾

また、同郡愛治村大字西野々において、昭和4年11月13日、全国農民組合予土協議会長井谷正吉の指導の下、全国農民組合西野々支部の小作農民兵頭住男ら14名があつまり、本年4年稲昨は旱害、虫害のため不作だとして、本年限り小作料15代以下は5割、16代以上は6割の減額を地主側に要求する事を決議し、翌14日地主に申し入れた(小作14名、地主8人、関係田3町、桑畑1町7反)。村の矯風会が調停に入ったが、解決せず、越年した²⁷⁾

また、同郡岩松大字芳原の前年よりの係争中の争議において(昭和3年12月12日、全国農民組合芳原支部の小作農民35名が、岩松町の大地主小西莊三郎・万四郎ら12名の地主に対し、従来慣行として徴収している口米、1俵につき1升は不当なる搾取であり、悪習慣であるとし、撤廃の嘆願書を郵送した。関係田8町2反1畝。日労党岩松支部主導。それに対し、地主側は、当地は田地方と異なり産米検査を受けざるものにつき、ただちに口米を廃止することは不当なり、本年度の凶作については温情主義により相当小作料を減額している、それなのに団体行動をとるは不穏当なりとの意向を表明した。その後、12月20日、岩松町役場に主な地主5名があつまり、警察署長とも協議し、農事改良、地主小作間の融和改善、争議調停をはかるため、岩松町役場に農業技手を雇い、その費用は地主側が負担することを決めていた)、昭和4年の秋に、小作側が自発的に良質の検査合格米を納入し、地主がそれに応え、1俵あたり1円30銭の補助を小作に出し、円満解決している²⁸⁾

26) 『昭和3年小作争議綴』、『海南新聞』昭和4年6月26日。

27) 『昭和4年小作争議綴』。

28) 『昭和3年小作争議綴』。

また、同郡二名村大字兼近において、同部落の小作農民35名は、昭和4年12月20日、知覚寺に年末総会を開催し、その時現村会議員の松浦太郎等が、4年産は平年作以上であるが、①経済界不況に伴い、繭糸の暴落、蚕業不振、財政極度の窮乏に陥っている、また、②昭和4年9月20日の県令第七十八号愛媛県穀物検査規則の改正により、俵装が複雑となり、小作人に不利益となっている、として、この際小作料を永久3代減額するよう（反当たり3斗）地主に要求する事を決議し、委員を選び、地主側に交渉することとし、争議となり、越年した（小作35名、地主9名、関係田11町歩）。この争議は翌年、村助役等が調停に入り、2月25日、助役宅に、地主代表と小作代表を呼び、種々調停し、3月2日、小作料永久5分ないし2割減で円満解決した。小作側に比較的有利な解決であった。²⁹⁾

南宇和郡城辺町において、当地は小作料が平均1石4斗と高率であり、他町村に比し、小作人は非常に不利益を受けており、又大正12年に三化螟虫の被害あったとして、小作料の減額を要求し（月日不明）、争議が起こっていたが、城辺町長の調停により、昭和3年の春に、1年限り1反当たり1斗5升を供与することで解決していた。しかし、4年3月、再び小作人が会合し、毎年肥料代名義の下に1反につき米2斗の小作料減額を要求することを決め、争議に入った（小作160名、地主60名、関係他130町歩）。それに対し、地主側が拒否し、抗争が続いたが、4年秋になり、4年産の稲作が2割程の増収であったため、この争議は自然解消となった。³⁰⁾

以上、この年の小作争議は、小作側の小作料減額の要求に対し、地主側が拒否し、小作地返還、小作料請求を求めて裁判に訴え、それに対抗して、小作側が小作調停法の申請を行い、その調停により、妥協的解決がなされているのが一般的である。そして、組合が関与している場合には、例外もあるが小作側にやや有利に解決しているのも見られた。

29) 『昭和4年小作争議綴』。

30) 『昭和4年小作争議綴』。